

ダニエル・ブラッシュ展 —モネをめぐる金工芸

21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー(六本木) 24. 01. 19~04. 15



本展は、「ダニエル・ブラッシュ」(1947~2022)の卓越した金工芸作品を、パリ、ニューヨーク、香港に続き、本邦では初公開される催事である。

この類を見ない展覧会は、素材の詩人であり、金属加工職人であり、宝飾職人、哲学者、エンジニア、画家、そして彫刻家でもある現代アメリカ人のアーティスト「ブラッシュ」に“オマージュ(敬意)”を捧げるためである。

ジュエリー史家「ヴィヴィアン・ベッカー」によれば、「ブラッシュの連作・モネについて考える」は、“幾つもの線を使って繊細に、光を分割する特定の角度で綿密に彫られているため、「油彩や水彩など光以外の色素では作り出せない、温かく、深く、情緒に色彩を見る人の目に熟考し挑戦している。」

連作「モネについて考える」

「ブラッシュ」は、アーティストとしてフランス印象派の画家が使う色彩、とりわけ「モネ」の淡いピンク、セルリアンブルー、カドミウムイエローといった光を取り入れた色彩に興味をそそられていた。そして、「モネ」が描いた野原に置かれた《積みわら》を見に出かけたが、“自然光の荘厳さは絵画からは感じられなかった”と語り、ジュエリーや宝石の魅力を感じるという「色」と「光」の完璧なマリアージュについて考えるようになったとされている。

更に、この最も強力な要因である「色」と「光」の完璧なマリアージュについて、どのように光が屈折するのか、回折線格子を使用した場合にどのように光が反射するのかを目にし、手彫りによる一連の彫刻作品の制作を始めた。

色々な作品は、いくつもの線を使って非常に繊細に、光を分割する特定の角度で彫られているため、油彩や水彩など光以外の色素では作りだせない、“温かく、深く、情緒に訴える色彩を写し出すことが可能”であるとされる。



山

無限のリング

イブニングカンバーセッション